英語ができたら、

Hello! WORK

「英語ができたら、将来どんなことができるの?」…そんなみなさんからの疑問にこたえるべく、英語や外国での経験を生かしながら日本や世界で活躍するさまざまな方にお話をうかがいます。

文・取材協力:髙橋和子　写真:編集部

※前編は10月号に掲載されています。
※11月13日(金)放送の“This Week's Special［This Month's Interview］”もあわせてお楽しみください。

FILE. 4 後編

インターナショナルスクール校長

玉木 由美さん

Tamaki Yumi

バングラデシュYOU&MEインターナショナルスクール校長。NPO法人YOU&MEファミリー代表理事。東京都の公立中学校で英語教諭をつとめたのち、2007年バングラデシュで学校を開設。翌年に日本からの募金により新校舎を建設。2013年に貧しい子どものための寄宿舎「Light House」を建設開始。2015年4月に日本の支援団体をNPO法人化、現在に至る。
www.youandmebangladesh.org

「途上国の子どもたちの教育に人生をかけたい」という思いを胸に、バングラデシュのガジプールという村で地元の牧師夫妻とともに学校を開いた玉木さん。その活動のベースになったのは、日本での英語教師としてのキャリアでした。

高校3年生のときに中学英語からやり直し英語が好きになった

――玉木さんは、どのようにして英語力をつけたのですか?

わたしはなぜか記憶することが得意みたいで、中学時代はすぐに英単語や英語の文の形を覚え、わりと苦もなく頭に入ってきました。しかし、高校に入ると勉強をさぼってしまい、3年生になって、はたと自分の英語力のなさに気がつきました。成績はクラスでも最下位近くとなっていました。これはまずいと反省し、中学英語までさかのぼって勉強し直しました。特に語彙力が大事と思ったので、単語集を暗記したり、問題集の中で意味がわからなかった単語はノートに控え、毎晩寝る前に復習しました。そのうちどの教科よりも英語が好きになり、英語教師になりたいと思い始めました。小学校の恩師がすばらしい方だったので、「あの先生みたいになりたい」と思ったのです。そこで、大学は教育学科の英語専攻に進みました。

――大学ではどのようなことを学びましたか?

スピーキングやリスニングに力を入れるようになったのは大学に入ってからで、会話の授業と並行してNHKラジオ「英語会話」を聴くようになりました。また、家の近くの教会にネイティブ・スピーカーのシスターがいたので、個人的に英語のレッスンをお願いしました。大学3年生の夏休みにはアメリカに渡り、現地の語学学校で学びました。こうした機会を重ねる中で、中学英語レベルの基礎力と語彙力、さらに恥ずかしがらずに発言する度胸があれば、会話に困ることはないなと思うようになりました。

――教員時代、英語を教えるうえで心がけたことは?

教材を通して異文化や平和について考え、意見をまとめて話したり書いたりする自己表現の時間を大切にしていました。わたし自身も英語力の向上に努め、東京都の英語研修に参加したり、個人的にネイティブ・スピーカーが教える公民館の英語教室に夜に通ったりしました。その英語教室は、1週間のできごとをノートに書き、ノートを見ないで書いた内容を発表し合うというもので、自分の思いを英語にする訓練になりました。

日本からの支援で新校舎が完成生徒数は350人以上に

――日本の生徒とバングラデシュの生徒とで学び方にちがいはありますか?

日本の生徒は恥ずかしがってなかなか英語で話そうとしませんが、バングラデシュの生徒はどんどん発言します。そのぶん上達が速いですね。近年は外国資本の工場が増え、英語力の有無で就職格差が生まれる現状があるので、英語を習得する意義を伝えています。

――ガジプールで学校を開いて1年後に新校舎が完成しました。

日本に帰国した際、当校のニュースレター第1号を作って友人、知人に送り、学校開設を報告しました。すると、心ある方々から寄付が集まり、新校舎の建設必要額が集まったのです。その後も支援の輪が広がったため、1人の里親(支援者)が1人の生徒への寄付をするフォスター・ペアレント(里親会員)と、学校全体の活動を支援するフォスター・フレンズ(一般会員)の枠組みをととのえました。それが現在のNPO法人YOU&MEファミリーへと発展したわけです。学校の評判は現地で口コミで広がり、現在は8学年350人以上の生徒が学んでいます。支援金以外でも学校資金を得るために、生徒の母親たちが作ったバッグ販売も始めました。ガジプールに大

スタジオでの収録後の1枚。玉木さんが話すバングラデシュの実情に、みなさん真剣に耳を傾けていました。

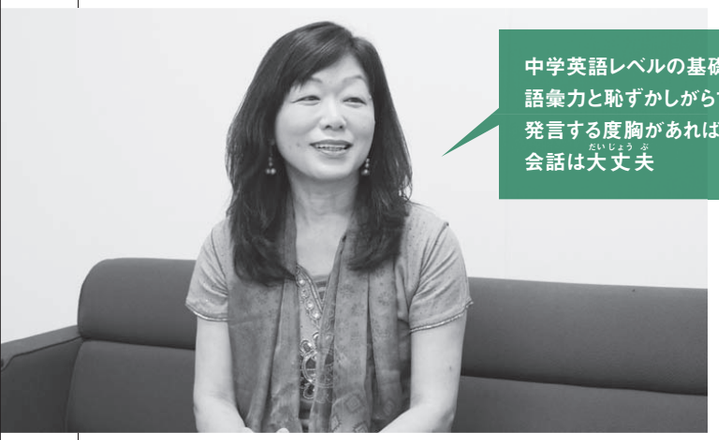
英語教師ってどんな仕事?

子どもたちの英語力を伸ばす仕事です。わたしは東京の公立中学校の英語教師を長年つとめ、現在はバングラデシュに開設した学校で校長をつとめています。英語の法則などを一方的に教えるのではなく、生徒がゲーム感覚で解答を見つけたり、教材を読んで感じたことを発表したりできるような参加型の授業を心がけてきました。授業の質を高めるため、教師も常に学ぶ努力が必要だと思っています。

日本の子どもは、お金や物に恵まれていても、家庭や友人関係の悩みを持っています。バングラデシュの子どもは、家族愛や隣人愛に恵まれていても、貧困という悩みを持っています。子どもたちの人生の大事な時期に立ち会い、喜びと悲しみをともにすることが教師の役割であり、やりがいだと感じています。

きな繊維工場ができて母親たちがそこで働くようになったので、バングプロジェクトは終了しましたが、その後、乳牛業、また養鶏業を開始し、学校資金の4割を自己資金でまかなえるようになりました。

――学校設立から8年がたちました。学校はどのように発展していますか?



中学英語レベルの基礎力と語彙力と恥ずかしがらずに発言する度胸があれば、会話は大丈夫

多くのバングラデシュの学校は、クラブ活動や生徒会活動、清掃活動などがないのですが、当校は豊かな心の形成を目指してそうした活動を奨励してきました。活動は根づき、日々の成果を発表する年2回の文化祭は、村をあげてのお祭りになっています。一昨年は、孤児や貧しい子どもたちが安心して教育を受けられるようにと寄宿舎の建設を開始しました。

将来は現地に拠点を移しみなさんからの愛のこもった学校づくりに力をつくしていきたい

――今後の夢は?

開校時に1年生として入学した子どもが前期中等教育の最終学年の8年生になりました。当校は今のところ前期中等までですが、今後は中期中等・後期中等に当たる9～12年生まで（日本でいう高校卒業まで）学年を広げられたらと考えています。わたしは現在日本からバングラデシュに、スタディーツアーを組んで訪問している形ですが、将来は自分自身が同国に拠点を移したいと考えています。そのあかつきには、今の当校の特徴であるクラブ活動や生徒会、清掃活動をもっと活発にし、世界一の学校を目指したいですね。また現在は自立と支援の両輪での運営ですが、将来は現地の完全自立が目標です。そして、日本人が運営する学校という特徴を目立たせ、日本語教室や、書道や華道など日本の文化に親しむクラブをわたし自身が受け持てたら楽しいですね。ゆくゆくは、生徒の中から日本留学を経てバングラデシュの発展に貢献するような人材を育てられたらと夢見ているところです。

――玉木さんには2人の息子さんがいらっしゃるそうですが、何と言っていますか?

息子たちはわたしの活動をずっと応援してくれています。2人ともバングラデシュの様子を見に来てくれましたし、美容師の次男は、「そのうち仲間たちと、生徒や親たちの髪を世界一の日本の技術でカットする美容師ツアーをやりたいね」と言ってくれています。家族や日本の支援者のみなさんとともに、みなさんからの愛のこもった世界一の学校づくりを目指していきたいです。

英語ができたら、

Hello! WORK

FILE. 4 後編

インターナショナルスクール校長

玉木 由美さん

玉木 由美さんに聞く 5つの質問

1 10代のころにやっておいてよかったことは?

読書です。わたしが読書の楽しみを知ったのは、小学校6年生のとき。担任の先生にすすめられるまま、夏休みの時期に毎日のように図書館に通い、1日1冊のペースで国内外の名作をたくさん読みました。読書は、文字の向こうにある景色や世界を思い描く楽しさがあって、想像力が育くまれます。文章力、読解力、漢字力がつきます。文章力や読解力は英語力に通じるものだと思います。また、人生でつらいことがあったときに、「今こそチャレンジのとき」と前向きな気持ちに転換する論理的思考力も、読書によって養うことができたと思います。

2 英語の勉強で苦労したことと、その乗り越え方は?

高校1、2年生のときに勉強から離れてしまった時期があり、予備校の短期講習についていけなかったときは、自分で情けなくなりました。くやしくて講習に通うのを1日でやめ、中学生用の問題集にもどって勉強し直しました。この「わからなくなった時点までもどる」ということが、わたしにはとても効果的でした。また、英語で日記を書いたり、ノートに書き留めた英単語を寝る前におさらいしたり、英語音声の海外ニュースや洋楽を聞いたりしていました。毎日英語に触れる時間を作るようにしていたことが、とてもよかったと思います。

3 英語ができたから○○○ができた。この○○○に入ることばは?

英語ができたから、「本当にやりたいこと」ができました。10代のときに志したのは教師で、念願かなって英語の教師になりました。その後自分自身のガンと家族の死をきっかけに、「途上国の子どもたちの教育に人生をかけよう」と決意し、退職しました。英語ができなければ行動を起こせなかったでしょう。英語のおかげでバングラデシュのワハブ牧師夫妻やガジプールの人々とも出会え、「本当にやりたかった」途上国での学校設立ができました。わたしは日本語、バングラデシュの人々はベンガル語を母語としますが、英語を通じて手を携えることができています。

4 教師の仕事に就くにはどういう資質が必要?

明るく前向きであることだと思います。日本の子どもたちもバングラデシュの子どもたちも、理由はちがえど多くの悩みを抱えています。そんな彼らに、「先生もつらいことがあったけれど、こんなふうに解決したよ」と言ってあげられるような人が、教師に向いているのではないでしょうか。教師とは、大輪の花を咲かせる生徒たちを照らし続ける太陽のような存在であると思っています。授業を計画するうえでは、淡々と知識を伝えるのではなく、子どもたちをあきさせないようなアイデアや創造性が大事ではないかと思います。

5 読者のみなさんにメッセージを。

途上国では、勉強熱心で才能あふれる子どもたちが、貧しさゆえに勉学の道を閉ざされている状況があります。日本に住む自分たちがどれだけ恵まれているのかを考え、周りの環境に感謝し、学業にはげんでほしいですね。多くを学んだのちは、世界に視野を広げ、苦しんでいる人たちのためにできることを探し、その実現に向けて行動してほしいと思います。興味のある人は、いつかぜひバングラデシュにあるわたしたちの学校をたずねてみてください。8月と12月の文化祭の日に当たれば、村中の人たちと楽しく交流できると思います!

Hello! WORK FILE

4・5月号	6・7月号	8・9月号	10・11月号	12・1月号	2・3月号
				次回はこの人!	?
クマムシ博士 堀川 大樹さん	カリフォルニア観光局 森川 由佳さん	不動産開発会社社長 藤島 正孝さん	インターナショナルスクール校長 玉木 由美さん	同時通訳者 石井 浩子さん	